

タ
ン
カ
レ



沢村 凜



講談社文庫

タソガレ

沢村 凜

講談社

著者 | 沢村 凜 1963年広島市生まれ。鳥取大学農学部卒業。'98年『ヤンのいた島』で第10回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。他の著書に『リフレイン』『瞳の中の大河』『あやまち』『カタブツ』『さざなみ』『黄金の王 白銀の王』『夜明けの空を掘れ』『脇役スタンド・バイ・ミー』『ディーセント・ワーク・ガーディアン』など。近著に『通り雨は〈世界〉をまたいで旅をする』『ぼくは〈眠りの町〉から旅に出た』がある。

タソガレ

さわむら りん
沢村 凜

© Rin Sawamura 2014

2014年2月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——凸版印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277756-8

目次

ある日、彼女の部屋で

7

恩知らずな彼女

15

憶測の彼方に

92

チャンスの後ろ髪

166

テストの顛末

てんまつ

225

別の日、彼女の部屋で

279

解説 郷原宏

286



講談社文庫

タソガレ

沢村 凜

講談社

目次

ある日、彼女の部屋で

7

恩知らずな彼女

15

憶測の彼方に

92

チャンスの後ろ髪

166

テストの顛末

てんまつ

225

別の日、彼女の部屋で

279

解説 郷原宏

286

タソガレ

ある日、彼女の部屋で

昼になじめず

夜に溶けこめず

タソガレときは 短すぎる

キッチンで水を飲んでいるときに、この三行が目にとまった。背の低い冷蔵庫の上
に開いてあった、B5判のノートの上の走り書き。

このノートは、ぼくの彼女が、読んだ本や聞いた言葉を何でもかんでも書き留めて
いるものだ。テレビで紹介するダイエットレシピなんかメモしているから、こんな
ところに広げてあったのだろう。

「これ、誰の言葉？」

グラスをシンクに置きながら尋ねた。

「え、何？」

リビングのベッドから、里美さとみが聞き返した。小さな1Kマンションのことだから、声が届かなかったはずはない。ぼくがベッドを出て一分とたっていないのに、裸のままで、もう本を読みはじめている。そのせいで、質問が頭に入らなかったのだ。

彼女のうつぶせのからだには、肩甲骨からヒップのあたりまでタオルケットがかかっていたが、ひざから先の脚を立ててゆらゆらさせているものだから、もつとも隠すべきところがちらちらしていた。ぼくはその光景から目をはなし、走り書きを読み上げて、もう一度「これ、誰の言葉？」と聞いた。

「誰の言葉でもないよお」

気の抜けた声に戻ってきた。

「でもさ、文字がひとりでに浮かび上がってきたわけじゃないだろう」

「うん。文字はそんなことしないけど、言葉は自然に浮かんできた」

上の空の口調。ページをめくる音。ぼくは読書のじやまをやめて、ひとりで考えた。

言葉が自然に浮かんできた。つまり、自分で思いついたってわけか。里美に詩を書く趣味があるとは知らなかった。

「ああ、だからカタカナなのか」

何かを書き写したのなら、「タソガレ」は「黄昏」と漢字になっているのがふつうだろう。自分で思いついたものだから、辞書を引かないと書けないような字はカタカナになったわけだ。

「え、何？」

ぼくのひとりごとに反応したらしい。里美が本から顔を上げて、こちらを見た。区切りのいいところまで読んでしまったのか、今度ははつきりとした声を出し、ぼくと目が合うと小首をかしげた。

「いや、この詩の意味を考えていたんだ。わかるようで、わからない」

「詩ってほどのものじゃないけど」

彼女はからだを起こして、ベッドの上であぐらをかいた。そのときタオルケットを肩からはおったが、慎みのためか、保温のためかはよくわからない。

「どんなに気の合う仲間といっても、どんなに楽しく笑っていても、ぴったりに同じじゃないんだよね」

「何が？」

尋ねると、里美は視線を宙の一点に据えて、眉根を寄せた。

「たとえば……友達と同じミュージシャンが好きだとわかって、盛り上がるときってあるじゃない。『あの歌いいよね』『あの詞のここが好き』って、うなずきあったりして、最高に幸せな気持ちになる。だけど、そういう時間はあつというまに終わってしまふ。そのうちに、『わたしはそこまで、あの曲がいいとは思えない』とか『あの詞にそんな感想を持つなんて、不思議だな』とか、同じミュージシャンを〈好き〉という気持ちの中の違いが、見えてきてしまう」

「それは……」

しょうがないよと言おうとしたが、彼女は両腕で、自分のからだを抱きしめていた。まるで何かから守ろうとしているみたいに。それで、否定的な言葉を口にするのはまずいと判断した。

「どこにいても、誰といても」

ぼくがそれ以上何も言わないのを確認してから、彼女はつぶけた。

「どこかでわたしはずれている。ぴったりじゃない。気の合う友達と爆笑しあっている最中にも、わたしの中には醒めている部分がある。悲しいニュースが届いてみんな

がしんみりしているとき、わたしの心の大部分もいっしょに悲しんでいるけれど、小さなかけらが『ふん』と冷笑している。そうしたずれを感じなかったのは、これまでの人生を振り返ってみても、飛び飛びのほんの短い時間ずつしかない」

里美は言葉を切つて、ぼくの顔をじっと見た。ぼくは小さくうなずいて、話のつづきをうながした。

「そんなことを考えていたとき、こんなイメージが浮かんできた。昼の明るさは、元氣になれて好きだけど、まぶしすぎてちよつと疲れる。夜の暗さも、落ち着けていいんだけど、どこか寂しさがつきまとう。昼と夜、両極端の時間帯のどちらにも、わたしは合わせられるけれど、ぴったりじゃない。わたしにとつてちよつどいい明るさは、昼から夜に変わる黄昏時のわずかな間だけ——。人生を譬^{たと}えると、そんな感じじゃないかと思つて、それを書き留めたつてわけ」

「へえ」

意外だった。彼女は、対人恐怖症でもなければ、哲学や心理学に凝^こつて物事をくよくよ考えこむタイプでもない。時として多少引つ込み思案になることはあつても、基本的にあつけらかんとした人間で、常に人生を楽しんでいるようにみえていた。その里美が、こんな想いを抱えていたとは。

「だけどさ」

あらためて考えてみると、〈ぴつたりじゃない〉のは当然なことだ。誰だつて、いつだつて、他人の心とか場の空気とかと、完全に一致することはない。どこかが必ずずれている。人間は一人ひとりが違っているからこそ、かけがえのない存在なのだ。ぼくと完全に同じ心の人間がいるとしたら、ぼくはいなくてもいいということになってしまう。

そんなことを、ぼくは無粋にもしやべつてしまった。里美は小首をかしげて聞いていたが、やがて小さくつぶやいた。

「わかつてるよ、そんなこと。だから、その文章は、それが大きな悩みつてわけじゃなくて……おもしろい比喻を思いついた気がしたから、メモしただけ。それより」

彼女は言葉を切ると、頬をぷうつと膨らませた。

「人の書いたものを、勝手に読まないでよね」

枕をつかんで、ぼくに向かって投げつけた。ふざけている証拠に、そんなに強い力ではない。ぼくは楽々受けとめた。里美の肩からタオルケットがずり落ち、胸がはだけた。ぼくはふたたびベッドに向かった。枕を元の場所に戻すためではなく。

つきあいはじめて一カ月。ぼくはまだ、彼女のからだに溺れていると言っているいい時

期だったのだ。

けれども、頭のどこかがひんやりしていた。

彼女はなぜ、タソガレの話をぼくにしたのだろう。ぼくの何気ない質問など、「何の本から書き写したか、忘れた」とでも言つて誤魔化すことができただろうに。

どこにいても、誰といても、ぴつたりじゃない。ずれている。

客観的に考えれば自明なことだが、誰かに対してはつきりと言葉にしていいいことはない。

なぜなら、それは、人と人とは完全にはわかりあえないという宣言だ。他人との間の見えない壁を、可視化させてしまう行為だ。

たとえば、人間は誰もがいつか必ず死ぬ。その厳然たる事実を、ふだんは忘れて生きている。忘れなければ平穩に日々を過ごせない。それと同じで、必要もないのに誰かの目の前にはつきりと突き出してはいけないことだ。特に、「ふたりは一心同体」と思いたい時期の恋人に対しては――。

それなのに、いったい彼女はこういう気持ちで、ぼくにあんなことを言つたのか。この疑問は、彼女の肌の温もりですぐに溶けて消えたけれど、里美の癖のある字の走り書きは、それから後、折にふれてぼくの脳裏に蘇った。